



〈上右〉現在の鐘楼堂(奥)と旧、鐘楼堂の屋根を残した花御堂(手前)。
 釈尊降誕祭ではこの花御堂に誕生仏が祀られ、甘茶をかけて祈願する
 〈上左〉鐘楼堂の梵鐘(龍殿鐘)。旧、梵鐘もこの中に溶かし込んで再建された
 〈下右〉永源寺歴代住職の墓碑。三十世までの住職がここに祀られている
 〈下左〉島田家の墓地。開基、島田右京亮利秀を正面に、コの字型に配されている



〈上〉大鐘殿法堂●間口22メートル余り、奥行20メートル余り、最高棟高21メートル余りに及ぶ県下に誇る名伽藍
 〈下〉降誕釈迦堂●大鐘殿法堂の完成に伴い、釈迦堂として移築された。釈尊降誕祭ではここで祈禱が行われる



本堂(右)と釈迦堂(左)が新旧の造形美を讃え合うかのように並び建つ境内。その間に建つのが花御堂

二十世黙室良要禪師により七堂伽藍が完成

開創以来の伽藍は寛文二年(一六六二年)の「丙丁の災」で焼失。その再建に尽力したのが、ときの長崎奉行島田忠政であった。翌三年、忠政によって伽藍は再興され、その際、忠政が中国から賜った降誕釈尊仏像や抱兔官女像、龍馬児遊香炉を寺に奉納した。この由緒をもって、以来「釈尊降誕祭」が執り行われるようになった。

その後、文化十年(一八二三年)、二十世住職黙室良要禪師によつて七堂伽藍は完成を見るに至る。これを期して、禪師の晋山式には全国から多くの禅僧が集ったといわれ、釈尊

降誕祭もまたひと際盛大な祭事として執り行われるようになった。

しかし、弘化三年(一八四六年)、再び全山が焼失。嘉永二年(一八四九年)、庫院のみを再建するが、明治以降は島田家の退転によつてその庇護を失い、本堂の再建は果たせぬままに四十年近い時が流れた。

これを自力で成し遂げたのが二十世住職孝山実道禪師である。明治十八年(一八八五年)、本堂が完成。現在の本堂は昭和五十一年(一九七六年)に建立されたものだが、旧本堂は「釈迦堂」として、また現在の本堂は「大鐘殿法堂」として、ともに新旧の造形美を讃え合うかのように並び建っている。



永源寺に伝わる寺宝の数々

- 1 後西天皇禅師勅賜御宸筆
- 2 降誕釈尊仏
- 3 龍馬児遊香炉
- 4 抱兔官女像
- 5 島田家奥方使用の化粧道具箱
- 6 徳川秀忠寺領安堵状が納められた御朱印箱

